

初代編集主幹 野村恭也先生を偲んで

— 個人的な思い出 —

加 我 君 孝^{1,2)}
Kimitaka Kaga

はじめに

『JOHNS』初代編集主幹の野村恭也先生(図1)が2024年5月より自宅療養中のところ、12月3日に帰らぬ人となりました。現在の編集主幹を代表して『JOHNS』へのこれまでの御貢献に心より感謝申し上げます。

野村恭也先生との出会い

筆者は1972年に、頭頸部悪性腫瘍の三者併用療法のパイオニア、佐藤靖雄主任教授の東京大学の耳鼻科に入局しました。助教授が内耳生化学と耳科学の新進気鋭、ハーバード大学のSchuknecht教授のもとで研究された野村恭也先生でした。

筆者は鈴木淳一教授と石井哲夫助教授の誘いで、入局後2年半で佐藤教授に許可を得て突然、帝京大学に異動することになりました。その時、野村先生は筆者に「そのうち東大に戻ってくるように」と声をかけてくださいました。その声は筆者にとって生涯忘れられないものとなりました。帝京大学時代(図2)、東大時代、そして現在の東京医療センター時代と何かにつけて声をかけてくださり、著書が刊行されるといつもプレゼントしてくださいました。野村先生はSPIO(国際耳鼻咽喉科学振興会)の理事長を19年間なさり(図3)、筆者はその副理事長や『JOHNS』の編集委員をしていたこともあり、しばしば先生とお話をする機会がありました。



図1 野村恭也先生
(1923.3.6 ~ 2024.12.3)



図2 筆者の帝京大学時代(1984.6.28)
東大医局の応接室にて、招待講演後の記念写真。左から野村恭也教授、二本隆講師、筆者、井上憲文先生。

『JOHNS』の名付け親

『JOHNS』は“ジョーンズ”と発音し、読者の多くの皆様からこの呼び名で愛されていま

¹⁾ 国立病院機構東京医療センター・感覚器センター〔〒152-8902 東京都目黒区東が丘2-5-1〕, ²⁾ 神尾記念病院



図3 「SPIO50年史」表紙
SPIO 50年の歴史の19年間、
野村先生が理事長を担当。

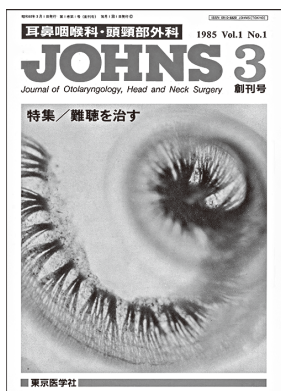


図4 『JOHNS』創刊号の
表紙 (1985年)
特集 / 難聴を治す。



図5 切替一郎先生と野村先生 (1983年)



図6 Schuknecht 教授と野村先生 (1983年)

す。東京医学社が1985年に新たに耳鼻咽喉科学の雑誌を創刊することになったときに、野村先生を中心に雑誌名をどうするか議論となり、“Journal of Otolaryngology, Head and Neck Surgery”の英文タイトルから“JOHNS”と命名されました。野村先生のユーモアのあるセンスから生み出された雑誌名です(図4)。筆者は野村先生から数えて6代目の編集主幹ですが、毎月、毎回6～8人の編集委員で、各号のタイトル、テーマごとに執筆者を選んでいます。学術特集以外に、連載では、古典あれこれ、診療つれづれ、私の研究歴、症例をどうみるか、など他誌にないユニークな月刊誌へと発展してきました。今年で創刊41周年を迎えました。

野村恭也先生との個人的な思い出より

1. 野村先生が尊敬する2人の先生

一切替一郎先生とSchuknecht先生

野村先生はSPIOで事務的な仕事を終えた後に筆者に学術研究の思い出をよく話されました。いつも目を輝かせ、楽しそうに回想しながらお話しされました。2人の尊敬する先生のこととは繰り返しお話しされたものです。野村先生が入局された当時の主任教授の切替一郎先生(図5)と研究留学先のハーバード大学 Massachusetts Eye and Ear Infirmary (MEEI) の

Schuknecht 教授(図6)です。「切替教授は100年に1人の逸材である」と繰り返し述べられました。

Schuknecht 教授は、眼光鋭く、Sunday School と呼ばれた日曜研究セミナーをするほど教育・臨床・研究に熱心な先生で、“Pathology of the Ear”の著書でも知られる耳科学の歴史的な人です。留学生の野村先生にGacek教授による内耳の美しい写真を見せ、「このような写真をMEEIのここでも撮れないであろうか」と言われたそうです。その言葉がNomura-Schuknechtによる蝸牛のAChEエステラーゼ染色による組織化学の論文の写真につながりました。この研究で野村先生の名が世界的に知られることにつながりました。

野村先生によると「Schuknecht 教授の机の

上にはいつもきれいで何もありません。それは郵便物等の新たに届いたものはその日のうちに必要なものは切り取り、あとは全部捨てるからなのです」とのことでした。

2. Noblesse Oblige

「政治・経済あるいは学問などで大きな成功をおさめた者の社会的責任と貢献の義務」というような意味です。この言葉をしばしば引用し筆者に話されたのは、教室の先輩で多チャンネル人工内耳手術をわが国の医療に定着させた船坂宗太郎先生と野村恭也先生です。御二人とも大学教授となられ、その業績から社会的成功者に例えられる方々ですが、生涯の自己を律し、かつ社会への貢献と義務を意識されていました。この“Noblesse Oblige”を行動規範として御自分を厳しくされたのではないのでしょうか。

3. 季節に合わせたお洒落な服装

野村先生を思い浮かべると端正なスーツ姿が浮かびます。季節の変化に合わせたスーツを着用されていました。数年前の日の照る真夏のことです。SPIOの事務所向かうべく、東京医科歯科大学の近くを歩いていたときに、筆者の目の前のすぐ近くを先生が歩いておられることに気がつきました。日傘にクリーム色の夏服のジャケット、グレーのズボン、そしてパナマ帽、なんとお洒落な紳士！写真に撮っておきたかったと何度も思いました。いつもきちんとした服装の紳士でありました。

4. 『耳科学アトラス』-50年にわたる刊行-

初版は野村先生が助教授時代の42歳の時の出版です。プレゼントしていただいた初版の表紙の裏に「謹呈 加我君孝学兄、野村恭也」と署名入りで、筆者はこの初版を大切にしてきました。自分の著書を友人に謹呈するときに野村先生にならって学兄や学姉としばしば書くことにしています。第5版は90歳の時でした。ご自分でも、このような耳科学の「形態と測定値」という類書は世界にないと自負しておられ、50年間に5回改訂されましたが、第6版のために常に資料を集めておられました。

5. 中国での3歳の思い出と“大地の子”

野村先生は1932年、中国東北部（旧満州）の鞍山で生まれました。野村先生はWikipediaに自分を「国籍中国」と書いてあることを発見し、その間違いにあきれていました。子どものころの中国の思い出として、おもちゃで遊んでいたところ、中国の子どもに取り上げられ返してくれなかったことが悔しかったそうです。もう少し中国に残っていたら山崎豊子の小説のような“大地の子”になるところだったと冗談のように言われました。

6. 野村先生からの葉書と年賀状

野村先生からしばしば葉書をいただきました。万年筆による大きな字で、内容が簡潔に書かれ、その枠にきちんと収まっています。構成と字数をよく考えて書かれたものと想像していました。野村流の万年筆の大きな字と簡潔な表現を筆者も倣うことにしています。毎年の年賀状は短い文字だけのシンプルなもの、これも野村流です。

7. トラブルの解決法 -“無視する”-

筆者は何か仕事上の問題があるときに野村先生にご意見をうかがうことがありました。先生は「無視しなさい」とはっきりと言われることがありました。初めは戸惑うこともありました。が、心理学上の問題解決法のうちの一つの「対応しない」という賢明なトラブル対処法であることを後に知りました。

8. 楽器演奏 -アコーディオンとピアノ-

楽器はアコーディオンを趣味とされ、昔は教室の会で演奏されたとのことです。有楽町のドイツピアホールでアコーディオンの演奏を聴くことを楽しみにされていたとうかがいました。野村先生というピアノです。野村先生はショパンの曲を好まれ、東大を去る頃より自宅のグランドピアノでピアノの先生について学びながら日々練習を怠らなかったとうかがいました(図7)。よく自分のピアノ演奏は“変曲”であると述べ、周囲を笑わせたものでした。ピアノの演奏はCDに録音され希望者に配布しました。



図7 自宅でのグランドピアノ演奏 (1992 年)

ショパンの「幻想即興曲」や「英雄ポロネーズ」がお気に入りでした。東京都地方部会が昔制定した「耳のうた」の編曲とピアノ伴奏が最後のCD・DVD 記録となりました。ご逝去の2年前のことです。

9. ご自分の健康と奥様の付き添い

歳を取るということは身体にどのような変化が生じるのか、しばしば短く説明していただきました。入院後は介護保険サービスを受けることになり、書類が大変とも体験談を語ってくださったものです。

野村先生と仕事の予定の打ち合わせをする、その日は奥様の病院受診の日と重なることがしばしばありました。それは奥様の病院受診に付き添う日であることを意味していました。これは真似できることではありません。筆者の外来でみる限り、奥さんの受診に夫が付き添う方が、夫の受診に付きそう奥さんより少ないように感じます。

10. ハッとさせられたこと

入局以来、長きにわたって何かにつけ教えてください、くださったことが数限りなくあり、筆者の人生の師の一人でありました。

ハッとさせられたことがありました。出版社の旧知の社員がSPIOに来られ、「野村先生は現在(90歳)も学術活動をされているのですね」と述べたときのことで。先生は「だから成仏できないんだよ」と応じたのです。思わず、ハッ

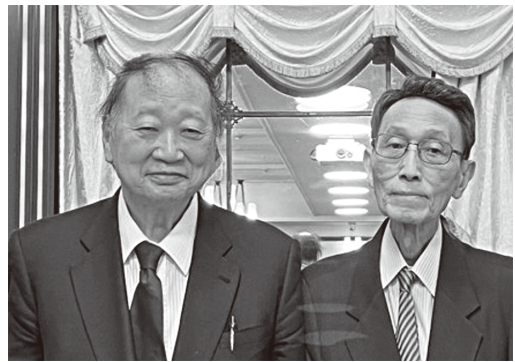


図8 東京大学耳鼻咽喉科同窓会にて
(2023年12月3日、野村先生と筆者、神田学士会館)

とさせられました。一方、「そろそろ仕事はこのへんにして寝ようかと思うと、また加我君が起こすんだよ」と言われることがありました。原稿の依頼や研究会の講演をしばしばお願いして野村先生を元気づけようとしたことに対する反応でした。しかしこの私の企みには喜んでいただけたと思っております。いつも深い内容のご寄稿、ご講演でした。

心に残る言葉

野村先生は研究や臨床に取り組むときはファラデーの著書、あるいは聖書の一部から引用して紹介し、読者を刺激しました。しかし私たちが鼓舞するのは野村先生御自身の思想とも呼ぶべき言葉です。以下に2つご紹介します。

1) 1つのテーマを追いつ続けると、それを進歩させる機会が必ず訪れるものと信じている。

2) 古い側頭骨病理スライドを新しい眼で見るとは、知識と経験の進歩が埋もれていた真実を掘り起こすことにつながる。

先生はいつも凛とした姿勢で、かつユーモアと機智に溢れたお話をされる方でした(図8)。

学問から人生のさまざまなことを御教示いただきありがとうございます。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。